

花曆封一巻四編下巻

東都

山々亭有人著

第廿三回

おそろしき女の化粧と清女が争もその阿こり

まじふも新庄件のお物温脱粉ぬるねは若るまを考の隠

長ぬ新よ江戸の水鏡ハをうつちり白牡丹べつり

白粧の都ッて自色が面よじし遊考と叫一能徳の

でう自色しあふ及バドトるふむうふ粧立今日一も山の

あつた... おのむら あつた あつた

弓の惣次郎除の一件ハ... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

殺場の一件一汁... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

あつた... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

例をとうと... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

知が彼... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

祥院... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

身... あつた あつた あつた

あつた あつた あつた

筆... あつた あつた あつた

きき
しん
おん
あつ
あつ
あつ

かへつとらり市川とらみ橋このかんとのへりてなみさきくうが

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき 六月廿の

とらり市川とらみ橋このかんとのへりてなみさきくうが

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

まぶさま まぶ のつるまをちまき ちまき 一どし ちまき

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ

あまの川にこの川の附のよの川付の由控へ、並に必由の川へ



おきん

赤坂次



武去来

てんは...
「一」
今...
...

志...
「一」
...

と...
「一」
...

と...
「一」
...

と...
「一」
...

と...
「一」
...

と...
「一」
...

と...
「一」
...

せんがうじしこひふ細まちうま切まも合ま鳥まが業まありまちせぬま嘉ま「まうま」

へつえうけふまあまのめまでま久まきま傍まがま澄まんまらまもま志まとまぬまがま何まのま板ま

壺ま極ま年まのま澄ま織まがま地まへま出まるまのまでま自ま色ましまもま安ま堵ま「まコまリまやま新まらま」

文ま治ま更ま存まけまるまのまりまぎまうまでまじまぎまらまうま「まそまりまやまアま知まらませま毛まをま成ま」

てま底ま、まちまりまきま等まうま結まりまのま女まをま受まけまるまとまこのま死まるま久まきま等ま「まとま何まもま他ま」

めま初まるまるまがまよまくまてま市ま川までま結ま上ま目まとま捕まゆまるまのまもま生まるまくま内ま

終まひまみま一まつまたまをまるま抽まてまちまらまうまきまらまうま「まさましまりましてま一ま並まくまあまらまままらまちま」

武ま多ま勝まさんまのま市ま川まへま「ま夫まよまやまアまをま成ま方まのまりまりまのま由まのま不ま成ま」

一 お景初めがらうる馬くつてもいさう 牧「あえまうこまてくつても

困る子 夫おアは雨と物と一と武三景がまらふの仲あむと

借もりよアねり 牧「あうーお風のまみナ 武「ナニぞうせ明く

居りまふらうト 夫よりと人の今中のみ由 惣山ひ松本ととと

とととと
とととと

第廿四回

くうんが我他の方やまきり多えおみ 洞の神のうられ

ぢと續ふ裁集ふえ人じ 為乃物居が 孫ああまねど

うのみ、あや、うらむら、え、とこと、まき、あき、まちびとらうや、めうらえん

彼七徳へ至るの終し男を請ふて或は病人と見えぬ

あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

さぬのは園由頼もあらじお頼よ件のみ答るといふ

あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

あるゆもあらじ流しづと自殺するえんをあらうさぬあれが心

あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

ありうる大徳が善えお園とありて善を園ふ給れて存命を援

ひも、うち、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

出上の市川あの大徳が御中給の人あまは是へ後りて

あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

あひ、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

もあひ、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

るふのや、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

るふのや、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

るふのや、あき、まき、まちびとらうや、めうらえん

今舟の渡し未し此の事早申刻由とされれば船と名の事なれど
川を渡る事なく渡し事ある事一トシて人たえもどし常川を生む
余ッ所どありまう子一トニテテウコトゾウニ里半ぶらあまぬ
どらう 後 お金六のららもよまらう物年か後一あまぬ
中まのる 毎一テ二今もあぞのらら一人あ八文で居るのどを繋り
まゝ ひとの世 後一あ船てもみませうらう。
ちのどと急ぐのどまらうは是れ也ア 船一まらう、船合の大橋
あつる後一人て出さうと居るませう 一そへあう物も居る

福入が其もむらさきまきと今ふふ念合が朱入とくう世のる茶

抱が未ら多らららのら十十後後「十二十二きりしてり指か多られあののをまらうらトト去られ

懐あ中まより武あ株も金きとふら出で「使しおやアア何な華はここままでで渡わししと

下ささら「果はりやアア氣きの毒多た万ま下さみく笑わととふふととあ

掉さ多た「七七彼か川かのま唯た中ち之の以も掉たささ「是こままととふふととも

虫む「不ふ掉た多たええととうう「はは甚しととゆゆふふおおああととああふふ

卵たまご所ところ遠とほびびののああるるままのの市いち川かわああるるふふ情なさけ入いががののととららおおああるるふふ

眼まなこ所ところ遠とほびびののああるるままのの市いち川かわああるるふふ情なさけ入いががののととららおおああるるふふ

びどりめりよきうね

とよき

が

ね

か

後物好今より物やアを今食ふも抱はる事おやアありおれ

あふ

そのうみ

あ

られ

ひき

さん

物由後生ぶサア生れ今お方の苦さう中た交て教紋被

あふ

そのうみ

あ

られ

ひき

さん

志やせり 後へいづま後が市川へ住てぶり世相五日ぬ

久

後へ

このま

い

あ

あ

物らまける物アありありを海おま入の云王成笑牛

どうぞ

えん

な

そのと

い

き

何年今貝塚也して勝くうとてお居るも一を今

どうぞ

えん

な

そのと

い

き

てりもや 之の肉残をりやアお入しゆりふまも往來あて

どうぞ

えん

な

そのと

い

き

いふあら是れがわん名へ色若深しこそまて身づら

どうぞ

えん

な

そのと

い

き

氷難波ドリヤと云つ七後七を拭とろく猿樂のぐく

どうぞ

えん

な

そのと

い

き

えんきり
とらぎ

シヤア 面例と腰帯と向く方ふむまきと志願おくら

きり
まむ
あつふ
さそく
しゆりかん

岩ふいむ武士が子連のふ意奴あやまらむ波舟人の

むまひ
ま
あひ
ありか

拍板へまらうとまふ何らるる尻指ふさりと例え内

らのあつふて
ま
あひ
あつふ
あつふ

被武士のふくも岩ふつあだ一艘の従えく湾

あつふ
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ

物くこまあの舟み糸うのり七後と難えんあふびつら

源
そち
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ

「ヤま方みか腰元のか後おやあつら 後「まきか安志源二

ま
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ

まきかお目みかま由面目あつ 一まの板列ま方登後

あつふ
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ
あつふ

まきかお目みかま由面目あつ 一まの板列ま方登後

ま

ま

ま

ま

家まふふ教のけけまふふとまふふおのまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

う地ふふ細のまふふとまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

お知しとれとまふふのまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

迹でもまふふのまふふとまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

でまふふとまふふのまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

あつしとまふふのまふふとまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

まふふのまふふのまふふとまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

まふふとまふふのまふふとまふふとまふふとまふふとまふふ

ま

ま

ま

ま

ま

ま

由

—たす

きん

—の

きん

何ういふ方々まづれふ細あつて整附のうちは常川よか候

あつて

てがき

きん

病も振ふも何ういふ候かおのりする器後のうら

あつて

と

と

あつて

きん

—と死ふもあつた先京とるふとくは稀女帝の

よあひ

まが

くちり

ゆかり

とちり

ふよのうと申すと夜明み給とて廓城技出系と途中

この

あつて

め

くちり

まが

東

はきとらまふお目ふうらまの若き—の由氷の池

あつて

保

まが

あんとおれを中まきうやうみ細うぞいづま

あつて

まが

あつて

まが

あつて

も常とゆの—の教のあつて紙とて麻と知とら切あ

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

あつて

り—常川入流の—の教とてのよき入道とてわく

美船ふらぬく 飛紙 瑞の 志 野 瑞の 中 七も 瑞 名 女 と あり 二

そ 方 が 志 瑞 夫 へ 美 船 あり 悔 油 足 あり 二 自 色 由 今 あり 市 川

の お 瑞 也 人 性 の の あり 志 方 也 其 の お 連 付 人 集 あり 瑞

ぞ ん ぞ 志 瑞

さ 志

瑞 志

志 志

志 志

志 志

あま 子 あり 西く ちやんちん こと

ふあき ちやんちん せしよま まるせえ 性かごふ 務事川へ 来りて 一うが

かぢ うちと うちと ちよふ ひと とき 何故と云ふ

伯父の 門を 成候ひ 一ふ 何事 人の 来りて 一何故と云ふ

かぎ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ

はるま 光が 是れ 親ふ 宵だ 一あまの 飛人 引き 来りて 一あまの 命

ある 一あまの 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命

かぎ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ

あまの 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命

かぎ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ ちよふ

一は 収りて 捕るの 自色へ 一あまの 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命

先人 続る 一あまの 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命 命

「その先人よと科らばし」
楷之帝み纏をめされ
「ウシ

よの星燈ノト楷之宗まきと
を居せぬや書死がさふさせ

キドとわらふふ取法めく
入来源は三橋
「志をうつく

者よの何世のは紙中めく
何世あめくは書
「我ら

別当白穢る権系が
紙中是あ
秘伝中が
将楷之帝

又逆の飛ふ書より
大あるは
「そのみ
紙は宵死
「花大

史纏らるる
及新引のぶ
今体ぬ
何書
「志をうつく

動心
中が
ゆが
朱書
源は
三橋
と申
若く
と人
流
書
の

びげぢ

ちん

ま

そむ

い

は不始ありとも父へ寄し七摺に常宵たしものいふ事よろ

あつち

これバ總目然らひぐきらひまぶらうん「親お宵ふ

そのめ

あふ

うき

とま

えど

そ

の

よう無が何由人よ人存ひもあかかろを主ふ必とあぶや

係

せいらいのこびやう

しやうち

あひさる

あつち

一仕賃多病よ由人かろ後地の光系を新々えまぶ

あつち

いん

いぬ

これく

さやう

自然気力も引き中べくと馬若由中せぶ我こもあは

あつち

ま

ぞんドくは二人出出あまあししの「らまざら」た彼が云

あつち

ま

ま

あつち

あつち

分持無一摺にま繼らうて「うらぶらう」らと六汝がう提

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

系の組ふと何まづ自色もあは難あまざつらよらあ

面とらひ金平と云はれぬ
源二五場ハ飛々りみぞらる
被考を云
あつて
あつて
その心
あつて

第廿五回

案下再説八百屋久三場ハ
借文一合

と云はれ掛ひとありしが
借文一合

家の極中あると云はれぬ
八百

屋久三場より出るる
八百

見ぢうひま

いふあま

いふ

いふ

いふ

同治新へ引ひししいお素ははい今の出し西の入るを武を武を素を

と云よまませぐ

と云よまませぐ

と云よまませぐ

と云よまませぐ

と云よまませぐ

と云よまませぐ

と云よまませぐと武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素を

孫の一はつたと武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素をと出しと素をのよ一はつた

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素を

と武を素をと出しと素をのよ一はつた

ど
ざうり
こひ

将やさうりえん弟ももろを道はかたじけなく

義堂う屋敷ふ知りてをさうりゆう七
奏後八面局

久そ病が根の七と甲すた者ば度極中と
まごころんか

今このころを程又い穿入もつとのと素
まごころん

何事か今この物事やういふと
まごころん

親なるさふや入陣さなをわ給ぐひ中
まごころん

ゆりのさうりえんきりの仁とも知れぬ
まごころん

下中うとさうりえんかたさうりえん
まごころん

海の中へみ流す由い入るを其な程受へるも人の由なす

ませ白ゆ人何年を悔み流しけて親父をかたしし

されま— おまじいおまじいおまじいおまじいおまじい

病ると変仁ありとていなる者もつねどあありと

いふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ

父み代らんとあま中か神妙あうとまあうと極中

— 今今今今今今今今今今今今今今今今

— 今今今今今今今今今今今今今今今今

代んとも又信切らう道しつがはし一々番成通きそ由助
うらぬけ程入らざる者理をそまきよふの親の助合に成
然らばよト思よつうなら番成ふとこまきし若く別人

きうぬお話のきうなる

是よりぬ一此料と一西と又、あやう被控

午の附う今令常よ今令武云流が定中

浄土しせお肉のあふま我々のあはむかき全

とも知るべしを卒あ流せしと又武云流が定中

そのまゝ つよそを あり づきま むて みへ なる さ ぬ の

幸今よ ふ 附 海 あり 一 自 第 品 家 入 武 云 海 先 の り 名 入

揚 所 赤 後 注 と 何 う と 件 の 自 第 と 出 せ 一 自 嘉

後 次 武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

望 一 一 と 明 白 あり 武 云 海 先 の り 名 入

と 捕 何 と 味 あ 未 お う と 自 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

同 性 あり 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

人 と 何 と じ 自 第 品 嘉 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登

武 第 品 と 何 せ 千 第 家 の 澤 自 今 と 登



お七



七春

七中

とくぢきん くらぎき くらぎ けつらま くらぎじ ぐんま

白状せしにさど海たる連なればよから夜は成る清

とく とく とく とく 飛み とく 下 とく ければ とく 幸 とく たる とく 社 とく

くぬみ とく みる とく くら とく し とく ぬく とく 飛 とく み とく 下 とく ければ とく 幸 とく たる とく 社 とく

おき とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

聖成る御うぬお牧の女のことある日 べ申山守人お被

とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

とありたきに英み武を播が良月西化英長もる捕

とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

さく者 とく 幸 とく 流 とく 又 とく 雨 とく せ とく ら とく れ とく ば とく 一 とく 件 とく 都 とく 七 とく 徳 とく 人 とく 七 とく び とく せ とく れ とく ゐ

とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

劫海に公陽春の仙とあるを 猶之弁と成る

とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

とある とく 七 とく 續 とく の とく 案 とく 執 とく 成 とく 方 とく へ とく 傳 とく 成 とく 成 とく の とく 心 とく と

とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく とく

必の代を とく 流 とく の とく 心 とく 世 とく 結 とく 結 とく の とく 心 とく 身 とく と とく 親 とく 親 とく と

あつて是れ後本妻と定む七者お七と妻とみ

せしむるもあつて勝つてあつて男女のあつ

まらふに方お早をあつてあつてあつてあつて

物ありとえ淫に云清み由加縁さしあつてあつ

あつて校物とさつてせを中さつてあつてあつ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつ

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつ



夫と妻と^{おとめと}し^{おとめ}と^{おとめ}身^{おとめ}方^{おとめ}又^{おとめ}婦^{おとめ}の^{おとめ}七^{おとめ}者^{おとめ}が^{おとめ}如^{おとめ}婦^{おとめ}を^{おとめ}中^{おとめ}に^{おとめ}
 家の^{おとめ}長^{おとめ}を^{おとめ}小^{おとめ}移^{おとめ}り^{おとめ}名^{おとめ}の^{おとめ}修^{おとめ}を^{おとめ}み^{おとめ}に^{おとめ}を^{おとめ}一^{おとめ}が^{おとめ}は^{おとめ}あ
 小^{おとめ}塘^{おとめ}と^{おとめ}紫^{おとめ}昌^{おとめ}を^{おとめ}せ^{おとめ}ぶ^{おとめ}か^{おとめ}移^{おとめ}す^{おとめ}修^{おとめ}音^{おとめ}が^{おとめ}婦^{おとめ}と^{おとめ}し^{おとめ}
 良^{おとめ}婦^{おとめ}よ^{おとめ}婦^{おとめ}一^{おとめ}の^{おとめ}目^{おとめ}如^{おとめ}者^{おとめ}又^{おとめ}人^{おとめ}なる^{おとめ}と^{おとめ}を^{おとめ}

花^{なま}
 曆^{どよめと}日^と封^とト^と
 女^が四^と編^と卷^と之^と下^と終^と

3500

